

とである。

日本医師会は医師全員を代表する日本で唯一の組織である。若手医師、勤務医、研究職等の意見をしっかり受け止め、さらなる参画を促すための取組みを今後も進めていく所存である。

会費減免期間終了後も医師会員として定着していただくことが重要であることから、日本医師会は、都道府県医師会並びに郡市区等医師会と一体となり、好事例等を共有しながら、医師会員であることが実感できる取組みを、積極的に進めていく。

まずは、会員手続きの簡素化等のため、本年10月から始まる新会員情報管理システム「MAMIS」を活用した会員情報の一元化などに取り組んでいく。

医師会活動においては、情報共有や相互理解、コミュニケーションなど、ともに行動することが重要と考えている。

今後も現場との意思疎通を深めるため、引き続き地域医師会とこれまで以上に緊密な連携を図っていく。

そして、地域から挙げられた情報を執行部、さらには会内委員会等で分析・検討するとともに、国の検討会や記者会見等の場を通じて発信していく。

医療財源については、税金による公助、保険料による共助、自己負担による自助の3つのバランスを取ることが大切で、自己負担のみを上げないことが重要であり、低所得者への配慮も不可欠である。

物価高騰や賃金上昇への対応も喫緊の課題であり、診療報酬のみならず、補助金や税制措置など、あらゆる選択肢を含め、今後も医療政策を提言し、実行していきたい。

閑話求題

徒然なるままに
宇部市 福田 信二

昨年6月30日でクリニックを娘夫婦（小田隆正、聖子）に譲った。今は旅行、読書、テレビの生活である。7月に松本、上高地、諏訪神社、奈良井宿と回った。福田（フクタ：名主本家はタといい、その他のものはダという）の家は信濃松本藩主の小笠原忠真について、播磨明石藩、そして、1632年に豊前小倉藩と移り、今の行橋市金屋に居ついたといわれており、もともと諏訪湖のあたりの出らしい。

最近、『鳩翁道話』という江戸時代の町人哲学である心学、卓抜な話芸で聴衆を魅了した、心学者の柴田鳩翁（1783～1839年）の口述録を読んだ。例えば、養子の辛抱の話。座敷の障子を立て合わせるのに大工を呼んだ。大工は新しい障子の上を少し削っては、鴨居にはめて確かめ、下を少々削っては敷居にはめて具合を見ている。こうして繊細な細工を何度もくりかえして、障子は静かに滑らかに開け閉めできるように仕上がった。家付きの両親は鴨居敷居であり、障子が自分である。自分が世の中に合わせなければという話である。